

令和2年度 研究の成果と課題

1. 研究主題「かかわり合う力の育成」

副題「『あい』のある学びを目指して」について

【低学年】

- ・自分の考えを持たせるところにまだ力を入れている段階である。
- ・「はなおさん」「きくはさん」の定着のため、指導の継続が必要である。
- ・競い合う姿はあったが、認め合う、励まし合うまではできていない。
- ・ペア交流がうまく機能させられなかった。
- ・つばき学級は、自学年の学習では自信を持てなくても、下学年の児童に学習を教えることで自信を持つことができた。話形を教えつつも、自然な関わりを大切にできてきた。
- ・土台はクラスの雰囲気。全員発表できなくても、反応が良かった、声が前より大きかったなどと教師が声かけすることで、児童にも広がってきた。

【中学年】

- ・研究授業では児童がよく話し合っている姿は見えたと、「かかわり合う力」が「育成されたか」の見取りが難しい。
- ・めざす「かかわり合いの姿」が明確になるとよい。
- ・主題と副題の違いはどこにあるのか分かりにくい。主題より副題の方を意識して取り組んだ感がある。

【高学年】

- ・指導と評価のため、「かかわり合う姿」の明確化が必要である。
- ・「かかわり合いが有効であったかどうか。授業を参観してもらわなければ判断しにくい。樹分の授業についてのセルフチェックが難しい。

2. 研究の重点「全員が相手意識をもって伝える場の設定」について

- ・ペア活動は有効であった。全体の場では表出が難しい児童でも、ペア活動であれば話すことのできる児童もいる。
- ・ペア活動の見取りにやや難しさが残る。
- ・まとめが終わった後の考えを確認する場面においては、交流が活発になり効果的であった。活動の意図や、タイミングが重要である。
- ・「全員が」となると難しさが残る。

3. 実践の中から（◎・▲）

◎自由な試行活動を伴った導入

→単元のゴールへの見通しを持つことができた。

◎単元のゴールを見通す成果物の作成

→自分の読んだ伝記について「リーフレットを作りたい」という意欲が継続できた。

◎発表の話型の提示

→キーワードを使って考えをまとめることで、共通の視点で考えを収束することができた。

◎揺さぶりの発問・パフォーマンス課題

→児童の思考が深まる場面を作ることができた。その結果、児童にとって必要感のある話し合いの雰囲気が生まれた。

▲フリートークスタイルでの考察の交流

→交流の目的が明確でなく、深まりに欠けた。

▲グループ活動による「かかわり合い」（主に話し合うこと）の良さを実感できていない。

→グループを解体してペアでの活動を取り入れても良かった。

4. 来年度へ向けて

【自分の考えを持ち、表出させる】

- ・まずは、自分の考えを持つことが必要ではないか。
→書き方の指導、自分の考えが持たせる手立てが必要である。
- ・国語科における作文能力の育成が急務ではないか。
→「始め—中—終わり」という型を理解させ、それぞれ何を書くのかを明確にする。
- ・「きちんとした言葉で説明し合う」意識を持たせることも大事ではないか。

【効果的なかかわり合いを行う】

- ・かかわり合いの目的の明確化
→教師と児童との間で、目的を共有する必要があるのではないか。

【子どもが見通しをもって学習に臨む】

- ・資質・能力を育成するために「見方・考え方」を働かせるには、単元の初めにつけたい力を理解させることが必要なのではないか。

今後（2月以降）の取り組み

【授業内での取り組み】（主に算数科において）

- ・文章題では、題意の理解のために、必要な数字やキーワードにチェックを入れる。
- ・終末場面では、学んだことを使って再思考し、考えたことを表現する場を設定する。
(金沢教育事務所「R2学力向上資料」より)

【授業外での取り組み】（主に朝学習において）

- ・1週間に一度、百マス作文に取り組む。

学校全体で取り組む視点

授業改善…学習活動・言語活動では、どんな力を具体的に身に付けさせるのかを見直す。
*教科書の目次や大切、巻末を参考にすると、カリキュラム・マネジメントが進む。
2・3・4年生で「原稿用紙の書き方」を基に指導して積み上げる。
基礎・基本…文字を正しく、きれいに書く。文章を正しく書く、校正する。
振り返り等で文構造を指導する
…×「今日分かったことは、～～分かりました。」
○「今日分かったことは、～～（こと）です。」

(「野々市市学習到達度評価市の傾向と対策」より)